

語り合う文学教育の会

2012年度 No.5 10月5日・文責 橋本博孝

2学期もたけなわ

今年は曼珠沙華の出てくるのが遅かったように思いませんか？ 毎年、この花を見てお彼岸が近いと思わされるのに、9月22日になってもほとんど出ていません。これも暑さのせいでしょうか。

それでも運動会の練習は続きます。

運動会が年ごとに全体主義的になっていく、という危惧を感じられた先生もいます。子どもにとって運動会とは何か、という論議がすっぱり抜け落ちたまま、保護者に見栄えのするように、演技の練習が繰り返される。子どもたちを手早く、きちんと移動させることが、だんだん教員の手腕力量のように言われる。言われるだけではなく、自分でもそうってしまう。それが恐ろしい。

指示や叱責ではなく、ほめながら言ってやるといいのよ、としたり顔に言う人がいるけれど、ほめようが叱ろうが、子どもは要するに先生の言うことに従っているだけ。自分で考えて行動していない。最終目標はどこかの国の軍事パレードのような一糸乱れぬ全体行進なのでしょうか。

特に若い先生が、そういうことに無批判、というより先頭に立って引っ張っているように見えます。若さの代名詞だった批評精神（今日風に言えば Critical-Thinking）はどこへ行ってしまったのか…。

せめて、先生も子どもも熱中症にならないように、こまめに休憩して水を飲みましょう。

奈良例会で出たつぶやきです。

その奈良例会はお彼岸の22日に開かれました。初めて来たという人を含めて9名の参加でした。菱井さんが「フレデリック」の教材研究を提案しました。ちょっと変わったフレデリックの価値を認めた、と言うより、フレデリックを価値あらしめた4匹のね

ずみに焦点を当てる提案でした。この授業は、11月17日の奈良教育大学附属小学校の研究会で公開されます。お楽しみに。

今頃になって申し訳ないのですが…

三重5月例会☆実践報告「かげ」・庄司たづ子さん

新美南吉の「かげ」は、近年ほとんど実践されていません。まだ語り合う会が生まれていない頃、三重の中川均さんが近畿東海サ連協（民教連）集会で実践報告され、大いに論議を呼んだことがあります。わたし（橋本）にとっては懐かしい教材です。

南吉選集などには載っていますが、目に触れる機会の少ない作品ですので、全文を以下に紹介します。

かげ 新美南吉

月が、まうえにのぼったので、木のかげは黒くなり、屋根はかがみのように白くなりました。

一本の木のえだから、ひらひらと、落ちてきたものがありました。それは今まで、木のえだでねおっていた、からすでした。

からすは、土の上に、足がついたとき、おどろいて目をみはりました。からすの下にはっきりと、まっ黒なかげが、うつっていたからです。

からすは、いままでに、こんなにはっきりしたかげを、見たことがありませんでした。まるで、そのかげは、生きているようでした。

「かう、かう、こらこら。」

と、からすは自分のかげに、よびかけました。

けれどもかげは、なんともこたえません。ただ、「はい、はい」というように口を開きました。

「お前は生きているのか。」

と、からすが聞くと、

「わたしは、生きています。」

と、こたえるように口を開きます。

「それでは、とぶことができるか。」

と、からすが聞けば、かげは、

「いいえ、走ることはできます。」

と、こたえるようです。

「なに、走ることができる。それでは、おれときょうそうしよう。おれは空をとぶ。お前はじべたを走る。いいかい。ほら、おかのこちらに、小さな森があるだろう。あそこが決勝点だ。」

と、からすはいいました。かげも、なにかいっているようでしたが、からすはそんなことにはとんちゃくなしに、とびたつ用意をしました。見ると、かげも走りだす用意をしています。

「用意、どん。」

と、いって、からすはとびたちました。

かげも走りだしました。

からすが空から見おろすと、まっ黒なかげは、畑のうねりの上を、波の上の木の葉のように、上がったたり下がったりしながら、走っていました。なかなかはやく走っていました。

からすは、負けそうになってきたので、いっしょうけんめいとびました。すると、かげもどんどんはやく走ります。これはいけないと思って、からすは、めくらめっぽう、はねを動かしました。ところが、かげのほうでも、おちゃくちゃに、はやく走るのです。

とうとうからすは、体中の力が、みんななくなったとき、決勝点のところに、ひらひらぱったりと、黒いてぶくろのようにおちました。するとかげも、からすといっしょに、決勝点についていました。

からすは、はあはあといきをきらしながら、

「いっしょだった。」

と、いうと、かげもくちばしを苦しそうに開いたまま、

「いっしょだった。」

と、いったようでした。

次の朝、森へ木を切りに行ったきこりが、森のそばの草原の上に、からすが一わ、死んでいるのを見ました。

これは庄司さんが教材としたものです。新美南吉の選集などに「幼年童話」のうちの一つとして収録されているものは、ほとんどがひらがなです。

庄司さんは数年前にも「かげ」を実践されています。その時の庄司さんの読みです。

相手を自分との比較の対象として、自分の物差しでしか見ることのできない「からす」。「からす」はうぬぼれと傲慢さから自ら自分に有利な競争をしかけ、「勝ち」にこだわって最後には命を落とすことになってしまった。しかし、夜中に命がけの壮絶な競争が行われたことなど、誰一人として知る者はなかった。「からす」が自分自身でもある「かげ」と我を忘れて張り合い、命をかけたことは、とても個人的な、小さなことでしかなかったのである。「つまらないこと」で命を落としたおろかな「からす」である。

翌日、木こりがからすの死を見つけます。なぜそんなところで死んでいるのか木こりは知らない、誰にも知られることのないできごとであったことが、最後の一文に凝縮している、そのことが、からすの愚かさを際立たせている、という読みだと思います。

クラスの子どもたちは、順番や勝ち負けにこだわり、優越感や劣等感にとらわれすぎているように思う、そんな子どもたちに、自分のすがたや友達との関係に目を向けさせたい、という庄司さんの思いもありました。からすに冷淡と言えば冷淡な読みです。

実際の授業では、子どもたちは負けず嫌いな自分や、弱いものを軽んじがちな自分をからすを通して見いだしていきました。

今回のとりくみの構えが、この実践の時と違うのは、「いっしょだった」という言葉に着目していることです。今回の庄司さんの読みです。

結局、体中の力をみんな使いきった「からす」は、決勝点の所に力尽きて「落ちる」。精根尽き果てて、まるで生き物ではない一つの物体のようである。ここで、「からす」のことばと「かげ」の言葉が初めて「いっしょ」になった。

競走前の「からす」は、自分との比較で「かげ」を見下し、自分を優位に立

たせようとしていた。それは、「からす」の「かげ」への語りかけと、「からす」が「かげ」に語らせている言葉から、よくわかる。そしてその位置関係は、競走が始まってからも続くのである。結局、自分がつくりだした「かげ」に振り回されて競走を終えるのであるが、息絶え絶えに「からす」が語った言葉は「いっしょだった」というものであり、「かげ」に語らせた言葉も同じ「いっしょだった」というものであった。

最後まで順位にこだわった「からす」であるが、この「いっしょだった」をどうとらえればいいのか。

前のように勝って当然という傲慢さはなく、勝つことはできなかったが負けなかった、ということで安心しているようでもある。「勝てなかった」という否定的なものなのか、「負けなかった」という肯定的なものなのか。

しかし、それよりも「からす」が「かげ」に語らせた言葉が、同じ「いっしょだった」ということに注目したい。当初は、自分が優位に立つように「かげ」に語らせていた「からす」であるが、最後には「かげ」に「いっしょだった」と語らせることで、「からす」は「かげ」を対等な関係としてとらえたと言えるのかもしれない。そうだとすれば「からす」の死があわれに思える。そして、「からす」と「かげ」がこの時一体化したようにも思える。

このように、前回の実践時とは少し違う「からす」像で授業に臨みました。

この場面に関わる実際の授業の様子を紹介しましょう。庄司さんが意識していたのはAくんとBくんの関わりです。

Aくんは、一人っ子で、親の期待が大きすぎる子のようにです。勉強も習い事も「やらされ」感が強いと言います。注意されると、イライラする態度を見せます。

Bくんは、積極的な子です。授業中もよく発言しますが、自分の思いをなかなか流暢には表現できません。

AくんはそんなBくんがはがゆいのか、何かブツブツ言います。また、Bくんが自分のできたことを素直に喜んだのを見て、「ナルシスト…」と小さく言ったこともありました。

Bくん・最初はさ、からすがかげに対して上から目線やったやん。最終的には「いっし

よだった」。「いっしょだった」というところで、平等になったと思う、からすとかげ。

庄司T・平等になったとBくんは思う。「いっしょだった」って、何がいっしょなんかな。

子ども・ゴールできたの。

庄司T・そうか。からすは負けたん？ 勝ったん？

子ども・負けた可能性もある。

子ども・同点。

子ども・えー、でも、かげの方がはやいんちゃうん。

子ども・引き分け。

庄司T・引き分けは、からすにとって満足なん？

子ども・満足じゃない。

Bくん・悔いが残った。「とうとうからすは、体中の力が、みんななくなった」。みんななくなった、というところで、この時点で死んどると思う。

Aくん・じゃ、なんでしゃべっとるん。

子ども・まだ死んでない。

Bくん・からだが…。

子ども・死にかけ。

Aくん・からだが死んどったらしゃべらんで！

B君の発言に敏感に反応しているAくんです。二人の関係がよくわかるやりとりですね。

このあと、競走中のからすの思いを話し合っ、いよいよ「いっしょだった」の読みです。ここでは、Bくんが活躍しています。「子ども」と表記しているのは、それぞれ別の子のです。

庄司T・「からすは、はあはあといきをきらしながら、「いっしょだった」と、いうと、かげもくちばしを苦しそうに開いたまま、「いっしょだった」と、いったようでした。」

そのように思ったのは、誰？

子ども・からす。

庄司T・「いっしょだった」と聞こえる。そう言わしてるんやな。この「いっしょだった」について、どう思う？

子ども・ここらへん、きれいな言葉使っとるから、ここの「いっしょだった」っていうの、「いっしょでした」って言うと思ったからさあ、この時だけ、ていねいにしてない。

庄司T・どっちの方が？

子ども・こっち、かげ。この時だけでいねいにしゃべってないと思った。

庄司T・「いっしょでした」って言うと思っとった。

子ども・ていねいに。

庄司T・今度はまったくいっしょやな。今までの言葉を見てみよか。

「かうかう、こらこら」に対して「はいはい」やな。「お前は生きているのか」に対して「わたしは生きています」やな。「それでは飛ぶことができるか」に対して「いえ、走ることはできます」というように書いてあったな。

全然ちがうな。上から目線で言ったんやな。なんか生意気って言うとおったな。

Bくん・それが平等になった。

庄司T・何が平等になった？

Bくん・言葉っていうか、気持ちが。

庄司T・気持ちの平等？　どんなふうに平等？

Bくん・「いっしょだった」、「いっしょだった」って言うので、え、なんか、なんか、気持ちじゃなく、言葉がいっしょになった。言葉づかいが。

庄司T・確かに言葉がいっしょやな。これまで自分が言う言葉に対して、かげの言葉はずいぶんていねいやったな。今度は「いっしょだった」に対して「いっしょだった」やな。ここは、どう思う？

Bくん・「いっしょだった」、「いっしょだった」というところで、からすは負けは認めないけど、引き分けて、からすは思っとるんや。

庄司T・わからん。Bくんはそう思うんな。負けてはない。

Bくん・うん、負けてはない。引き分けやと思うもんで、同じ言葉づかいになったと思う。

庄司T・最初は、どんなつもりやった？

Bくん・勝つと思っと思った。

庄司T・負けてはない、勝ってもない。

Bくん・うん。

Cくん・思ったんやけど、なんかさ、このからすは一人で何でも進めて、絶対勝つと思っと思って、それで「いっしょだった」というのは、負けたとも思っっていないけど、自分で勝ったとも思っっていないし、そこらへんは、ちょっと成長したと思う。

庄司T・からすに変化があった。

子ども・最初のときは上から目線で、自分の方がえらいと思っと思って、それでも競走をして、からすとかが同点やって、いっしょやったもんで、どっちも強いんやなあっと思って、同じやったもんで、それでからすが勝ったとしたら、そういう言い方じゃなくて「勝った」と言うやろうし、いっしょやったもんで。

庄司T・自分は勝ったとは思っっていない。もしそう思うとるんやったら、「いっしょだった」、「いっしょだった」とはならんやろ。この言葉から、相手もなかなかやる、相手を認めた。これまでは相手を見下しとった、それがちゃんと相手を認めて、「いっしょだった」。

Bくん・かげ、勝っと思ったら、どうなっと思った？

庄司T・それはありえんのやけどな。

子ども・もし、かげが先についとったらさ、こっちは「いっしょだった」って認めとるやんか。もし認めてなかったら、自分の方が負けたのに、勝ったって言いそう。

庄司T・でもここは「いっしょだった」と言ったようでした。じゃあ、ここは順位がいっしょだったということだけじゃなくて、今、何人かの人が出たのからすると、立場もいっしょになった、ということ？ 相手を認めて、これまで見下しとったのが、同じ立場になった、その意味の「いっしょ」なん？ それが、Cくんが「成長したんじゃないか」と言った、感じたこと。

Bくん・「からすは、はあはあといきをきらしながら、「いっしょだった」と、いうと…」。

この言葉に全てをかけた感じ。

庄司T・だれが。

Bくん・からすが。

庄司T・何のすべてを？

Bくん・「いっしょだった」という言葉。

庄司T・「いっしょだった」と言うために。

Bくん・うん。

庄司T・何も言わずに。そうとうえらいはずやから、何も発せずにだまっとすることもできるのに、息を切らしながら「いっしょだった」って言った。

Bくん・言いたかった。

庄司T・なんで言いたかった？

Bくん・このままだまっとったら悔いが残るんさ。

庄司T・どんな悔いが？ 勝ちたかったのにさ、だまっとったら…。

Bくん・でも…

庄司T・Bくんやったら「いっしょだった」って言いたいんやな。(Bくん・うなづく)
ちゃんと言葉にしたいんやな。

子ども・なんか、ここで、やっとかからすが変わった。

庄司T・このからすのことを、どう思う？

子ども・最初は、なんかさあ、みんな、ちょっと、ほとんどの人が、あほって言うたやん。あほっていうところで、今は「いっしょだった」っていうことを認めたやん。からすが認めた。なんか、なんて言ったらええんか、Cくんと同じで、成長したと思う。最初は、みんな、あほとか言いよったけど、からすのあほ、というところが、ほんまのからすのことが出てないように思う。

子ども・かげは、からすのことが好きなんかなあ、と思った。

庄司T・かげ？ かげは生き物じゃないよって、感情はないやろなあ。生きとるように思う？

子ども・最初は上から目線でえらそうにしてたけど、最後には認めたよって、ええ意味でえらくなった。成長した。

庄司T・何が成長した？ 成長の中身は？

Cくん・「用意、どん」とか、決勝点とか、自分で決めて、自分で勝手に進めてったのは、負けず嫌いにしとったのが、いっしょについて、自分でうそついて「勝った」とか言うんじゃないくて、「いっしょやった」って自分で認めたのが、成長したなって思う。

子ども・負けず嫌いじゃなくなった。

子ども・最初いばっとる感じしたけど、今のはやさしい感じになっとるように思う。

庄司T・確かに、スタートするときには「からすはそんなことにはとんちやくなしに」。
ここでも無視しとるな。それが、今はちゃんと認めとるんじゃないか。そこに成長を感じる。

このあと、授業は、翌日木こりがからすの死体を見つけるところに進みます。からすの「成長」があったにしろ、それは誰にも知られることはなかったという展開です。

最後に、子どもたちは、からすがなぜ命をなくすまで競走したのかにかかわって、負けず嫌い、勝ちたい一心だった、競走に夢中になっていたのも、相手が自分のかげだと気づく余裕がなかった、という読みをしました。そこでBくんは、

「かげってき、最後にかげって知ったらさ、なんか、あっけない。最後にさ、かげって知るとき。知らなくてよかった。知ったら、なんか悔い残る。」

と言います。「悔いが残る」という言葉がこの時のBくんからはよく出てきます。庄司さんに、「どんな悔い？ 命落とした方がよかった？」と発言の意味をたずねられると、

「ぼくなりには、かげって最後に知ると…、からすがかげのことをかげって思っていないやん。でも、最後に、かげって思うと…、なんて言ったらええか…。」

と、まとめきれないようです。

庄司さんは、ここまでの記録でも、Bくんの言葉をよく切り返しているようにも見えますが、これはこの子がなかなか自分の思いをひとまとまりに言えないからです。Bくんの発言を問いただしているわけではありません。

庄司さんのとりくみの紹介は、Bくんのからすの競走についての感想でしめくくります。

ぼくは、からすが「いっしょだった」と、はあはあ息をきらしながら言ったところで、成長したな、と思いました。理由は、最初は上から目線だったけれど、最後にはからすとかげの関係が平等になったからです。からすは負けそう

になったので、いっしょうけんめい飛びました、という負けず嫌いというところが、ぼくとよくにてるなあと思いました。とうとう、からすは体中のすべての力を出し切った、というところで、よくがんばったなあと思いました。からすは「いっしょだった」という言葉にすべてをかけていると思いました。ずるがしこいからすが成長して死んだところで、かげのことをかげと知らんで死んでよかったなあと思いました。

ぼくは、からすとかげの競走が、からすはずるをしたけど、からすはからすなりにがんばろうと思ってずるをしたと思います。そう考えても、ずるはだめだと思います。

この授業で、こどもたちは、数年前の実践時にもまさって、からすとかげの関係をとおして自分をしっかり見つめていると思います。さすが庄司さんの学級は、のびのびと自分の読みを語り合います。わたし（橋本）は、子どもの中に生まれた作品を語り合うことは、「〈読み〉という形をとった自己表現だ」という言い方をよくしますが、庄司さんの授業を見ると、本当にそうだと思います。

次の「かげ」の授業にむけての課題は、「かげ」とは何かが深められないまま、現実の友だち関係などの勝ち負け、負けると悔しいといった感情の話し合いになっていったことです。庄司さんも、何度か、かげは生きてはいない、かげの言葉はからすがかげに言わせているのだ、つまりかげは実体ではないのだ、と子どもたちに言っています。それにもかかわらず、子どもたちは、かげを実在する物として見ているようです。最後の「いっしょだった」で、からすがそれまでの独善的な態度を変えたのだという〈読み〉も、かげは実体ではない自分の分身だ、という要素を入れると、意味が変わってくるのではないのでしょうか。

影を実体として読んでしまうことを乗り越えないと、からすのしたこと、競走で命を落としたことの意味がもう一つ鮮明にならないのではないかと感じます。つまり、子どもが他の誰かと競い合うのは、自分の中に競争相手をつくっているからです。Aくんが、まさに実体であるBくんを意識するということは、Aくんは自分のつくりあげた自分の中のBくん、言いかえれば自分自身と張りあい、競走しているとも言えます。

もう一つ。からすは自分の競争相手がかげだと知らなかったのでしょうか。物語は、こう語られています。

からすは、いままでに、こんなにはっきりしたかげを、見たことがありませんでした。まるで、そのかげは、生きているようでした。

「かう、かう、こらこら。」

と、からすは自分のかげに、よびかけました。

かげだとわかっているが、そのかげを生きているかのように思ってしまった、と読めます。自分のかげだとわかっていて競走した、となると、また違う物語が生まれる可能性がありそうです。

いずれにしても、問題提起の多い実践報告でした、ありがとうございました。

◇12月22日(土)三重例会です。午後2時半から5時、いつもの三重大学教育学部国語科演習室です。福井先生の実践報告です。例会後に忘年会をします。こちらもたくさん来てください。

奈良の12月例会はありません。

◆日本文学教会国語教育部会の冬合宿が、12月26日(水)27日(木)と山梨大学であります。藤原先生・横山先生・橋本が参加予定です。ほかにも行ってみようかなと思われる方があれば、11月中にご連絡ください。

◇来年の話ですが、1月例会は、

奈良＝1月12日(土)奈良教育大学附属小学校、内容は未定です。

三重＝1月26日(土)三重大学で日下先生の実践報告です。